

政治の展開

～明治維新から太平洋戦争終戦までの唐津～

■明治維新

明治元年は、1868年（慶応4年）である。明治維新は、直接には尊王攘夷を目標にし、倒幕となったが、神武創業の古に復ることが、新たに進むことであるという理論であった。ともかくも維新の大業に参画した人たちは、自分は国家の命運を荷っているんだという自負と国家百年の大計を樹てるんだという高邁な気概に満ちていた。不幸に見解を異にし、明治7年佐賀の乱、明治10年西南戦争にて果てた人たちについてもこの国を思う志は同様であった。

新政府に参加し大いに活躍した人たちは、いわゆる薩長土肥の出身者が多かったが、おなじ肥前といっても、唐津藩は別で、唐津藩2代藩主大久保氏いらい代々譜代大名が治めたところ、殊に、幕末には小笠原耆岐守長行が老中となって幕府政治の責任者たる地位にあった関係上、明治政府との間はうまくいかず、唐津出身者で政界や軍閥の大立物になったものは1人もいなかった。明治のはじめ選ばれて上京した人たちもわずかに学界にて若干の地歩を占めたに過ぎなかった。

明治2年（1869年）、諸藩は版籍を奉還した。旧藩主は藩知事に任命され、唐津藩は小笠原長国侯は子爵に列せられ、従来の藩域を治めることとなる。家老は、大参事となり、旧藩主との精神的な殿様、家来との関係はずっと後まで続いた。

明治4年（1871年）、廃藩置県の詔書が出される。これによって唐津藩は唐津県となり、藩知事小笠原長国侯は、唐津を去り東京で暮らすこととなった。ここに、はじめて殿様と家来という封建的主従関係は実質的に廃止された。同年11月、唐津、厳原県は廃止され、厳木地方の旧幕領と共に伊万里県に併合された。唐津には、伊万里県出張所が大手口役所におかれ、所長持長伝弥が赴任した。明治5年、佐賀県と改められた。伊万里県は6カ月半であった。

明治6年1月には、郡を区に改め、同10月には、その区に村長をおいた。これによって、江戸初期以来の郷村制度は崩壊し、200余の村は49の村に統合され、庄屋さまと百姓の関係は、お役人と村民の関係にかわった。唐津の支配県は、（明治4年7月～唐津県）（明治4年11月～伊万里県）（明治5年5月～佐賀県）（明治9年4月～長崎県）（明治16年5月～佐賀県）となる。

■町制の発展

明治22年、唐津町（旧城下町を領域）が成立。明治29年、松浦橋（旧満島橋）落成。大正13年1月満島村は、唐津町に編入。昭和6年2月唐津村、唐津町に合併。町人口は3万人余り。これによ昭和7年1月唐津市誕生。昭和16年佐志町と合併。

（戦後、昭和22年町名設定。昭和29年鏡村、久里村、鬼塚村、湊村が唐津市と合併。人口約8万人。その後、平成17年の大合併、人口約13万人と続く。）

分野 歴史

地域 全域

◎地図・写真・統計資料など



舞鶴公園から眺めた昭和初期の松浦川

（『唐津探訪』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『唐津市史』

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html